

博 士 学 位 論 文

内容の要旨および審査結果の要旨

第27号

2021年

東 京 国 際 大 学

は し が き

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的とし、2021 年 3 月 13 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は、学位規則第 5 条第 1 項（いわゆる課程博士）によるものであり、乙は同条第 4 項（いわゆる論文博士）によるものである。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏 名	論 文 題 目	頁
乙第8号	博士 (心理学)	尹 成秀	在日コリアン青年の対人関係における情緒的体験に関する研究 —差異をめぐる葛藤について—	1

氏名・(本籍地)	尹 成秀 (韓国)		
学位記番号	乙第8号		
学位の種類	博士 (心理学)		
学位授与の日付	2021年8月30日		
学位授与の要件	学位規則第5条第4項該当		
学位論文題目	在日コリアン青年の対人関係における情緒的体験に 関する研究 —差異をめぐる葛藤について—		
論文審査委員	(主査) 教授	妙木 浩之	(東京国際大学)
論文審査委員	(副査) 教授	大矢 泰士	(東京国際大学)
論文審査委員	(副査) 教授	池田 政俊	(帝京大学)

論文要旨

(1) 論文概要

本論文は、これまで民族的アイデンティティの問題、差別や偏見といった社会問題が強調されてきた在日コリアン青年の抱える問題を、臨床心理学の立場から捉えなおし、彼らが在日コリアンとしての生きる際に直面する情緒的体験について検討し、心理臨床の立場から彼らを支援する際の視点を呈示することを目的としたものである。在日コリアン青年が在日コリアンとして生きる際に直面する情緒的体験は数多く存在することが考えられる中で、本論文ではまず二つの体験について検討を行った。ひとつは、これまで強調されてきた民族的アイデンティティの問題とも密接にかかわる親子間の母文化継承における体験である。もうひとつが、在日コリアン青年が本論文の対象であることから、青年期の発達課題を考える上で重要な同世代の対人関係における体験である。これらの体験を質的研究によって検討した結果、在日コリアン青年の対人関係における「差異をめぐる葛藤」が見いだされた。「差異をめぐる葛藤」とは、「在日コリアン青年が対人関係の中で、在日コリアンにまつわる事柄をめぐる、相手との間で差異に直面した時、差異を否定的に意味づけ、評価懸念などのネガティブな情緒が生じる一方でそれと相反する相互理解欲求などの情緒も生じ、直面する葛藤」と定義される。この問題が彼らの対人関係上の困難の中核的な要因であることが示唆された。そこで、在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」と民族的アイデンティティが、彼らの友人に対する感情にどのように影響を及ぼすのかについて、量的に検討を行った。その結果、彼らの友人関係を考える上では、民族的アイデンティティのみならず「差異をめぐる葛藤」について考慮する必要があることが示唆された。さらに、筆者の実践した在日コリアン青年へのサポート・グループを活用した支援について検討し、在日コリアン青年への心理臨床的支援の必要性やそこでの留意すべき点についての考察を試みた。以上の検討から得られた知見を踏まえて総合考察では、在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」

についてモデルを呈示し、この葛藤の理解において重要な視点について考察し、心理臨床の立場から彼らを支援する際の視点について論じた。

(2) 論文の構成および内容

本論文は全6章の構成である。

第1章では、まず本論文における在日コリアンについて定義し、在留外国人統計の資料から今日の在日コリアンの人口数について記述した。次に、在日コリアン青年について、18歳～30歳までの者とし、その人口数、境遇について整理した。そして、社会学、教育学、心理学、精神医学の分野における在日コリアン青年に関する先行研究を概観したところ、特に彼らの民族的アイデンティティの問題や彼らを取り巻く差別と偏見といった社会問題について検討がなされていることが明らかになった。先行研究では、これらの問題が、彼らに不安や劣等感といったネガティブな情緒的体験を引き起こし、その体験が深刻な場合には臨床上的リスクとなることが示唆されていた。また、精神医学分野の知見からは、彼らの在日コリアンとしての情緒的体験がパーソナリティの形成や精神疾患の症状形成に影響を及ぼし、治療者が彼らの体験について理解が乏しいことが治療上の困難となる可能性が示唆された。しかし、従来の研究では、民族的アイデンティティの問題や社会問題を重視するあまり、彼らの情緒的体験そのものについて十分に検討が行われていないことが窺えた。このようなことから、支援と密接にかかわる知見を生み出す臨床心理学の分野の研究においては、在日コリアン青年が在日コリアンとして生きる上で直面する情緒的体験について明らかにする必要性と意義が考えられた。

第2章では、在日コリアン青年が在日コリアンとして生きる上で直面する情緒的体験について検討を行うため、親子間の母文化継承における体験を取り上げ、そこでの子の体験について明らかにし、考察を試みた。在日コリアン青年10名の母文化継承にまつわる語りを、KJ法を用いて分析した結果、「子の母文化継承における親の影響」と「子の母文化継承における親子間の違いに対する思い」の2つの大グループが見いだされた。考察では、親子間の母文化継承の中で生じる子の葛藤は、子自身の母文化継承に対する思いと親子関係にまつわる思いをめぐる葛藤であることが明らかになり、この葛藤が親子間の母文化継承に対する意識や態度の差異によって生じる可能性が考えられた。このことから、在日コリアン青年の抱える葛藤は、対人関係の問題ともかかわる葛藤であることが示唆された。

第3章では、第2章の知見も踏まえて、在日コリアン青年の同世代の対人関係における体験に着目し、日本人との対人関係と在日コリアン同士の対人関係について検討を行った。在日コリアン青年14名の語りを、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した結果、「日本人との関係における体験」と「在日コリアン同士の関係における体験」の2つのカテゴリー関連統合図が生成された。考察では、彼らが日本人との関係でも在日コリアン同士の関係でも、相手との間にある差異を望ましくないものと意味づけ、同時に相手の差異に対する反応を想定し、相手との

関係性にまつわる葛藤が生じることが明らかになった。そして、日本人との間でも在日コリアン同士の間でも生じるこの葛藤を「差異をめぐる葛藤」と命名し、彼らが在日コリアンとして生きる上で繰り返される体験であり、この体験が彼らの対人関係に困難をもたらす中核的な要因であることが示唆された。

第4章では、第3章で見いだされた「差異をめぐる葛藤」が、在日コリアン青年の友人に対する感情にどのような影響を及ぼすのかについて量的に検討を行った。その際、「差異をめぐる葛藤」の中でも「出自の差異をめぐる葛藤」に焦点を当てた。検討にあたっては、まず「出自の差異をめぐる葛藤尺度」を作成した。因子分析の結果、「相互理解欲求」と「評価懸念」の2因子8項目となった。そして、在日コリアン青年106名を対象に、「出自の差異をめぐる葛藤」の「評価懸念」、民族的アイデンティティ、友人の出自が、在日コリアン青年の友人に対する感情に及ぼす影響について3要因分散分析(混合計画)による検討を行った。その結果、在日コリアン青年が、友人との間で言いたいことを話したり、自身の思うことを伝えたり、相手との間で自分自身を確立するためには、従来指摘されてきた民族的アイデンティティを高めるだけでなく、「出自の差異をめぐる葛藤」の「評価懸念」を和らげることが重要であることが示唆された。

第5章では、筆者が試みた在日コリアン青年へのサポート・グループの事例を検討し、在日コリアン青年への心理臨床の立場からの支援の意義について論じた。グループメンバーは在日コリアン青年3名であり、グループは全6回実施した。事例の経過において、メンバーが自身の民族性のあり方が問われるような話題においては、ときに自身のありのままの情緒を語り難くなることが示され、その情緒とは、自身の民族性について「割り切れない情緒」であることが考えられた。また、この「割り切れない情緒」を語る事が容易ではない背景として、「差異をめぐる葛藤」が実際にグループの中でメンバー間に生じた可能性が考えられ、「差異をめぐる葛藤」の「評価懸念」が高まると、人との関係を意識するがゆえに友人に対して不安を感じる事になり、グループの場であっても語る事が難しくなることが示唆された。

第6章では、在日コリアン青年の「差異をめぐる葛藤」について、第2章から第5章までの知見をまとめモデル図を呈示した。そして、この葛藤を理解する上で重要な3つの視点について論じた。すなわち、「差異をめぐる葛藤」は、在日コリアン青年自身の差異に対する意味づけによって生じるものであること(視点1)、彼らの葛藤は目の前の相手との関係形成や関係のあり方をめぐる葛藤であり、かつ彼らにとって触れにくく扱いにくい問題であること(視点2)、さらに、この問題は特定の相手に限定されることなく対人関係の中で反復されること(視点3)である。次に、在日コリアン青年にとって、なぜ差異が対人関係上の問題になるのかについて、従来指摘された日本社会における在日コリアンに対する差別や偏見の問題、欧米の移民研究の知見、今日の在日コリアン青年の特徴と日本文化の心性との関連の3つの観点から考察を試みた。最後に、各章の知見を踏まえて、心理臨床的支援の場での在日

コリアン青年の対人関係における「差異をめぐる葛藤」の取り組みについて、アセスメント、援助関係、援助者の中立性、そして、いかにして被援助者と共に援助者がこの葛藤に取り組むことができるのかについて論じた。

学位（博士）申請論文審査報告書

【審査結果の要旨】

審査委員長は本学人間社会学部教授妙木浩之、審査員は同人間社会学部教授小田切紀子、同人間社会学部教授大矢泰士、帝京大学文学部心理学科教授池田政俊の四名であった。以下審査結果について述べる。

1. 論文の主題と構成について

論文の主題は「在日コリアン青年の対人関係における情緒的体験に関する研究—差異をめぐる葛藤について—」になっている。もちろん在日コリアンという概念は、大韓民国（韓国）朝鮮民主主義共和国（北朝鮮）、そして日本との関係で、それぞれの歴史的な経緯のなかで、どれが在日コリアンと明示的に境界線を引きにくいという問題があるように見える。当初から、本研究の発表に関して議論されたことだが、デモグラフィックデータや母集団の規模がわかりにくいという点が議論された。だが「在日外国人に関する心理学的研究を概観すると、渡日してきた短期滞在者や長期滞在者に関する研究が大半を占め、その中でも青年期の者を対象とした研究が多く見られる。しかし、在日外国人青年の中には、渡日してきたのではなく、日本で生まれ育った在日外国人青年も存在する。彼らの場合、日本語を母語とし、日本文化の中で生まれ育っていることから、母国から渡日してきた者とは課題が異なる可能性が示唆されている(秋山, 1998)。それにもかかわらず、日本で生まれ育った在日外国人青年に関する心理学的研究は、母国から渡日してきた者たちの研究と比較するとまだまだ少ない」のも事実である。そのためいろいろな資料から母集団を推定するという方法での研究を承認することになった。

実際在日外国人青年の中でも、在日コリアン青年の臨床心理学的問題とその心理臨床的支援のあり方についての研究として、これまでの本領域で「社会学や教育学の分野を中心に知見が蓄積なされており、数は少ないものの心理学や精神医学の分野における研究も散見される」現状を考えれば、「臨床心理学の分野では在日コリアン青年に関する研究は乏しく、そのために臨床現場で彼らと出会い支援を行う際に、彼らの抱える問題をどのように理解すればよいかわからずとまどうことも少なくない」だろう。本論文のなかで述べている「在日コリアン」の定義は、以下のようになされている。「韓国・朝鮮籍の特別永住者」のみならず、日本国籍を取得した者、国際結婚によって生まれながらに日本国籍である者、朝鮮・韓国籍と日本国籍を合わせ持つ者なども含む」。実際、この定義のために国籍や在留資格の数では、本研究で定義する在日コリアンの数を正確に求めることは不可能であるともいえる。難しいのは、統計的研究なら母集団の特定や明確化が難しくなってしまうことであった。そのため本研究は、質的な研究、そして支援のなか見えてきたことが中心に論じられているともいえるだろう。

さらに審査者たちが議論したのは、以下の点であった。

「在日コリアンはもともと一見しただけでは日本人と見分けることができない「隠れたマイノリティ(Hidden Minority)」とも評される。今日の在日コリアン青年の多くは、名前や国籍、生活環境など多くの点で日本人青年との相違が少なくなり、両者の境界は増々曖昧になっていることが窺える。実際、在日コリアン青年自身も、青年期になるまで自らが在日コリアンであることを全く知らない、あるいは知らされていないこともある(浜本, 1996)。しかし一方では、日本籍在日コリアンの存在からも窺うことができるように、自身のルーツや自民族への帰属意識を保ち、在日コリアンであることを自覚しながら生活する者も存在する。また、たとえ、日本人青年と変わらぬ生活を営んでいたとしても、日常の中で在日コリアンに対する差別感情に直面することは少なくないと考えられる」。

つまり明確に外面的なスティグマや差異がある場合に起きるマイノリティ問題とは違って、在日コリアンの青年たちが、実は相違が隠れており、内在化された問題として差異が問題になる。この点は、真相の問題としての差異が問題化しやすいのだろう。実際、差異の意識についての研究の意義はこの点にあるのだろう。

そのため本博士論文の構成は以下のようにになっている。まず、第2章において、在日コリアン青年の親子間の母文化継承における体験について検討。そしてこれを通じて、母文化継承の支援が彼らにとってネガティブな体験とならないために、心理臨床的観点からどのような点に留意する必要があるのかについて考察を試みる。次に、第3章において、今日の在日コリアン青年の同世代の対人関係における情緒的体験について検討。具体的には同世代の日本人との対人関係と在日コリアン同士の対人関係を取り上げ、それぞれの対人関係の中で在日コリアンであることをめぐって直面する出来事とそこでの体験を明らかにする。第4章では、第2章と第3章の質的研究から示唆された「差異をめぐる葛藤」が、彼らの対人関係にどのように影響を及ぼすのかについて、質問紙調査によって実証的に明らかにする。そして、第5章において、筆者の実践した在日コリアン青年を対象としたサポート・グループの事例について検討を行い、心理臨床の立場から彼らを支援する意義について論じる。第6章では、各章で得られた知見をまとめ、総合考察を行うことになっている。

ちなみに、もし本論の主題である差異の葛藤が主題になるなら、その葛藤を取り扱う臨床心理学的な考察として、これに加えて事例研究があれば、もっとも説得力があっただろうという意見もあった。

2. 在日コリアン青年の親子間の母文化継承における体験に関する研究について

第二章の主題となっている主題、母文化継承、については、「在日コリアン青年が母文化継承の中で直面する情緒的体験を理解する上では民族学校や民族学級での体験のみならず、その根幹を形成し心理的側面にも影響を及ぼす親子間の母文化継承

における体験について」は確かに検証に値する議論だと思われた。調査方法は、面接調査によるもので、データ収集はインタビューによっては10代後半から20代の14名の在日コリアン青年に対して行われている。このデータは第三章にも使われている。面接調査で親子関係についての語りが見受けられた10名(男性5名, 女性5名, 平均年齢: 22.1歳)の語りを分析に用いている。方法論は、KJ法であった。もちろんKJ法は、GTAなどと比べて、質的な方法としての厳密さは犠牲にして、発見的な方法を選択したもので問題はある。これについては審査のなかでも議論になった。ただ「子の母文化継承における体験では、親から一方的に母文化継承がなされる場合には割り切れなさや納得できない体験となること、民族的劣等感を強く抱く中での親の言動が子の民族的劣等感の形成に影響を及ぼすこと、子は親子間の母文化継承の中で親とのズレを感じたり、この問題を親と語りあうことに難しさを感じることを、親子間の母文化継承には朝鮮半島の分断されたあり様の影響も受けること、そして、自身の母文化継承の意識を大切にしたいという思いとそれによって親子関係が悪化する不安との間で生じる葛藤」を浮き彫りにしている点は評価できるという結論であった。第三章は「在日コリアン青年の同年代の対人関係における体験」を、同様な主題として取り扱っている。ただ今度は、手法を変えて、質的データの収集にエピソード・インタビューを用いている。そのため今度は質的により厳密なGTAの分析を用いている。方法論の厳密化という意味で、2と3とを合わせて考えるなら、結論の部分「在日コリアン青年の在日コリアンとして生きる上で直面する情緒的体験として同世代の対人関係における体験」を対象としているとみなして良いだろうということになった。

発見された「差異の葛藤」「差異の意識」は、研究全体の主題だが、質的研究の探索的な側面を生かした、重要な知見であるという点、結論して良いだろうという判断を審査では行った。

3. 量的な側面についての統計的な研究

第4章は「在日コリアン青年の出自の差異をめぐる葛藤、民族的アイデンティティ、友人の出自が、友人に対する感情に及ぼす影響」についての研究である。この論文の中では、唯一統計的な県境が行われている。当初研究計画の全体では含まれていなかったが、審査の最初の予備的な発表の中で、博士論文には必要だとされて、追加されたものであった。

在日コリアン青年114名を対象に、質問紙調査を行っている。分析では、記載に不備のあった8名の回答を除外し、106名(男性68名, 女性38名, 平均年齢24歳, $SD=3.67$)を対象とした。106名の調査協力者の背景について、国籍については、106名のうち、韓国籍が61名, 朝鮮籍が39名, 日本籍が6名であった。民族教育の経験については、106名中、99名が民族学校に通った経験を有していた。差異の概念を考えるうえで、「出自をめぐる葛藤(高群・低群)」と「民族的アイデンティティ(高群・低群)」そして「友人の出自(日本人・在日)」の3要因分散分析(混合計画)を行

っている。統計的な検討は十分妥当なものであると結論された。この統計研究では、前章前々章で抽出された「差異をめぐる葛藤」が、在日コリアン青年の友人に対する感情にどのような影響を及ぼすのかについて量的に検討を行ったものだが、友人関係に影響する概念であること示されているとみなして良いと判断された。結果として在日コリアン青年が、目の友人との間で言いたいこと話したり、自身の思うことを伝えたり、相手との間で自分自身を確立するためには、従来指摘されてきた民族的アイデンティティを高めるだけでなく、出自をめぐる差異の葛藤の評価懸念を和らげることが重要であることが示唆されている。

4. 臨床的な応用

第5章は、上記まで検討されてきた「差異の葛藤」を、臨床場面で用いた実践報告になっている。こうした研究は、事例研究がもっともすぐれているかもしれないが、場面あるいは事例の選択などが難しい。そのためここではグループセッションが選択されているのだろう。また第4章では、在日コリアン青年の友人に対する感情は、差異をめぐる葛藤の評価懸念、民族的アイデンティティ、そして友人の出自の影響を受けることが示されていた。その連続で考えるなら、こうしたサポート・グループでの体験は、第4章で示した量的な研究の結果と呼応しているとみなすことができるだろう。本論文の論者によるサポートヘルプグループの経験に報告になっている。X年Y月からX年Y+2月にかけて全6回の開催とし、隔週で同じ曜日の同じ時間帯に行った。一回のグループの時間は90分であった。場所はZ大学内の一室を借りて毎回同じ部屋で開催したものである。論者は在日コリアン青年へのサポート・グループの事例を検討し、その考察から、在日コリアン青年への心理臨床の立場からの支援の意義について論じている。グループの経過の中で、メンバーが自身の民族性のあり方が問われるような話題においては、ときに自身のありのままの情緒を語り難くなることを見出されている。その情緒とは、自身の民族性について「割り切れない情緒」であることが考えられ、在日コリアン青年にとって、割り切れない情緒を語ることは容易では容易なことではないものの、一方では、割り切れない情緒について語り合い、受け入れてもらうことを通じて、自分らしくありたいという思いを有していることが示唆されている。また、この割り切れない情緒を語ることが容易ではない背景として、差異をめぐる葛藤が実際にグループの中でメンバー間に生じた可能性が考えられた。また、差異をめぐる葛藤の評価懸念が高まると、人との関係を意識するがゆえに友人に対して不安を感じることになり、グループの場であってもありのままの情緒を語ることが難しくなることが示唆されている。そのため、ファシリテーターはグループが安全な場であり続けるようにファシリテーションを行い、メンバーがグループの中で直面している情緒を捉えていく必要があるという提案がなされている。

5. 全体的な「総合考察」について

本論文の研究は、在日コリアン青年が在日コリアンとして生きる際に直面する情緒的体験について検討を行い、そこから得られた知見を踏まえて、心理臨床の立場から彼らを支援する際の視点を呈示することが目的であった。本論文によれば、在日コリアン青年の対人関係における差異をめぐる葛藤を理解する際の重要な視点は3つある。論文によれば、「1つ目は、対人関係の中で在日コリアン青年自身が、在日コリアンとして生きてきた体験や在日コリアンおよび朝鮮半島にまつわる様々な情報によって培われた認識から、差異を望ましくないものと意味づけ、その差異は相手にとって望ましくないものと推測すると同時に、ほかならぬ自分自身も差異を望ましくないものと捉えてしまうことである」そして「自身の葛藤を十分に吟味することなく割り切るように対応せざるを得なくなる。このように、重要な視点の2つ目には、彼らの葛藤が、目の前の相手との関係形成や関係のあり方をめぐる葛藤であり、彼ら自身にとって触れにくく扱いにくいものであることがあげられる」、だから「その場では割り切ったように対応をしても内心では割り切られることなく葛藤は保持されるために、彼らには不全感が生じたり、新たな相手との対人関係の中で葛藤が再燃することになる。このように、重要な視点の3つ目は、特定の対象に限定されることなく、対人関係の中で葛藤が反復されることがあげられる」となる。以上三点をまとめるなら、

「在日コリアン青年の対人関係における差異をめぐる葛藤は、彼ら自身の差異に対する意味づけによって生じるものである(視点1)。彼らの葛藤は目の前の相手との関係形成や関係のあり方をめぐる葛藤であり、かつ彼らにとって触れにくく扱いにくい問題である(視点2)。さらに、この問題は特定の相手に限定されることなく対人関係の中で反復される(視点3)。これらの視点は在日コリアン青年の対人関係における差異をめぐる葛藤が、彼らの抱える臨床心理学的問題であることを示唆しており、この問題が彼らの心理的困難や生きづらさの要因になると考えられる」。

以上のモデル提示は、総合的に見て、臨床心理学の、特に異文化領域で仕事をす
る人々に対して少なからず寄与するところがあると審査員たちは判断した。

6. 審査結果

論文の論旨には、今後の課題をそれぞれの章に分けて論じている。ただ全体として審査においての結論だけで良いように思われる。全体として、本研究は、日本で生まれ育った在日外国人青年の中でも、在日コリアン青年の臨床心理学的問題とその心理臨床的支援のあり方について検討を行っている。在日コリアン青年の同年代の日本人との比較から対人関係と在日コリアン同士の関係、そして母文化継承における親子関係における彼らの体験について検討にすることを通じて、彼らの対人関係における「差異をめぐる葛藤」の問題を明らかにしている。質的な研究、量的な

研究、そして臨床現場での実践という構成になっており、「差異に関する葛藤」を中心に、在日コリアンの青年がもつ臨床的な課題を浮き彫りしている。全体で6章の章立てになっていて、最初に文献研究から、最後の総合考察まで、構成およびその内容は十分なものと言える。この研究主題は、臨床心理学では珍しく、希少であり、オリジナリティが高いという点では審査員たちは一致している。審査員の一人からは、だからこそ、そのテーマがユニバーサルかどうかについての疑問が提示されたが、それは今後の発展によるものだろう。

そして被審査者が今後どのように発展させるかについての説明があった。審査員たちの問いに対して、彼が答えた内容から、臨床心理学的な発展が期待できることがわかった。在日コリアン青年の抱える問題については社会学や教育学の分野を中心に知見が蓄積なされており、主に社会心理学や精神医学の分野における研究が散見される。それらの研究では、彼らが特有の問題や生きづらさを抱えていることが指摘されている。しかし、臨床心理学の分野では在日コリアン青年に関する研究は乏しく、そのために臨床現場で彼らと出会い支援を行う際に、彼らの抱える問題をどのように理解すればよいかわからずとまどうことも少なくないという。その意味ではこの発展は臨床的にも意味があるという確認が行われたといえる。また本研究の意義は、その部分を補足して、さらに彼らが心理学的にどのような悩みや心理を抱えているのかを明らかにしようとしている点で、オリジナリティだけでなく、臨床心理学に対する貢献は少なくない。

研究の初期段階の発表では、いわゆるデモグラフィックデータが不足していて、統計的な調査研究が十分でなかった。そのために厳しい指摘も受けたが、今回は、それらを十分に説明できていたように思う。統計的な研究は、今後被審査者の研究者として不可欠なものなので、十分にそれらに関する知見を持ち合わせるようになったと思われる。この研究が民族意識の高い青年の対象群を取り扱っているのではないか、という質問があり、そうではない対象へのアプローチに関しての質疑が行われた。これについては、全体の構成を考えて、調査を補填している点は臨床心理学研究として評価できるという意見が審査者との間であった。以上①の論文内容、および②の研究の質に関しては十分な論考と言える。